

山片蟠桃と海保青陵の經濟思想について

井 上 実

は し が き

懷徳堂學派の經濟思想については、先に拙稿「懷徳堂學派の經濟思想」^①に、中井竹山と山片蟠桃の經濟思想の比較を通じて明らかにした。蟠桃は実に長年にわたって懷徳堂に学び、中井門の「諸葛孔明」と称され、その代表的人物であった。蟠桃はまた科学的分野へも強い関心をもっていたが、その該博な知識を、あくまでも現実的な生活のうちに来たえあげた実學者であった。彼の現実的な合理主義は、ライフ・ワーク『夢ノ代』^②に展開されている。

本稿では、山片蟠桃と海保青陵の經濟思想のいくつかの問題点をあげ、比較して論じようと思う。もともと、青陵と蟠桃とは同時代人で、青陵は蟠桃より七歳若い、文化十四年(一八一七)六十三歳で京都に没し、蟠桃は文政四年(一八二二)七十四歳で大阪に没している。しかも青陵は、その『稽古談』や『升小談』^③(升小は升屋小右衛門の略称)などで、蟠桃の經濟策を大いに賞揚している。^④たとえば、蟠桃が種々の經濟策を講じて仙台藩の財政のたてなおしを行なったことは名高いが、青陵は、

今升小ノ仙台ノ大身上ヲ一人ニテ引受ケテ、吞込ミテ富國ノ法ヲ立テ、奉リテ、他國ノ遠國ニ居テ大國ヲアヤツルコトハナルホド大腹中ナリ、江戸ナドニハケ様ノ大腹中ノ人ヲバ鶴(青陵の名、早鶴の略称)ハアマリ見ヌナリ、(『升小談』)と驚嘆し、

升小ガ工夫ニテ仙台侯ノ御身上ズツト立テナオリタル由来ヲキクニ、米ノ切手也。(『稽古談』巻之二)

などといい、さらに具体的に蟠桃の経済策を紹介し、称賛している。それにもかかわらず、ここに青陵を取りあげたのは、この両者の経済思想を対比して行きながら、本質的なものに見解の差異を把握し、その所以を論究することによって、懷徳堂学派の経済思想の特質を明らかにしたいと考えたからである。

なお、山片蟠桃の思想の概要については、前稿でかなり述べたので、参照していただければ幸いである。

一、思想形成の歴史的環境

懷徳堂の諸師の学問に対し、それを享受した蟠桃の学説は、きびしい生活体験のうちに、独自の内容を付与し、必ずしも師の経済思想を祖述したものとはいえないものであった。この他『夢ノ代』の凡例に述べられていることから知られるように、天体の説及び無鬼論に至っては、明確に懷徳堂の学問の範囲を超越したもので、換言すれば、これらは学問的知識の進歩性と町人の学問の性格を示すものである。

つまり、蟠桃の学問は懷徳堂における朱子学にとどまらなかった。天文学を麻田剛立に学び、蘭学にも深い関心を示した。だがこうして、天文・地理学の近代的西洋自然科学の知識の摂取を容易にしたのは、懷徳堂における合理的・実学的な「格物致知」の精神があったからである。懷徳堂における中井竹山・履軒の教えも、麻田剛立の教えも、合理的・実学的であり、そこに蟠桃の合理主義・実証的精神が大いにそだてられた。しかしまた反面では、彼の実生活が、いやおうなしに合理主義をそだてたのであり、それを学問によって裏づけるため、積極的に学ばせることになったともいえるのである。

こうして蟠桃の全思想は、江戸時代において彼と立ちならぶもののないほど徹底した合理主義・唯物主義でつらぬかれ、それが『夢ノ代』全編に展開されることになったのである。

青陵の学派系統については、彼がその自伝を記している『稽古談』に、自己の学問上の立場を説明している。海保

青陵、名は皐鶴、字は萬和、通称儀平、青陵と号した。宝曆五年（一七五五）、丹後官津城主青山大膳の家老角田市左衛門の長男として、江戸にて生まれたが、のち角田家を弟に相続させ、自分は曾祖父の本姓海保を名乗った。そのことについては、ただ

何モ高キ議論ノアルコトニモアラズ。文章家ハ姓ノアマリ俗ナルモクルシキユヘニ、海保ガ雅ナル姓ニテ、復姓ニヨキ字ナルユヘニ復シタル也。（『稽古談』巻之五）

と、述べている。青陵は、さりげない説明のうちに、学問をもって身を立てるといふ強い意志を貫徹したことを示しているのである。その学問については、まず、

先生（青陵の父）ハ始メハ春台門人ノ大塩与右衛門トイフ儒者ノ門人也。後ニ瀧水先生宇佐美恵助ノ門人トナリテ、徂徠派ノ儒者也。鶴ハ十バカリノトキヨリ宇佐美先生ノ門人ニテ、鶴ガ二十三ノトキ先生卒セリ。（同右）
という。いうまでもなく、春台は荻生徂徠の高弟太宰春台であり、宇佐美瀧水は徂徠晩年のいわば最後の門人で、特に徂徠の著書を校訂整理した人物として著名である。青陵は父および宇佐美瀧水など徂徠学派の系統により、若い儒者としての思想が育成された。この学派系統より受けた影響が、青陵の著述にみられる、功利主義的・実証主義的な学問態度を育成した大きな所となったのであろう。この点は蟠桃と大きく相違している。

しかし青陵は、晩年に、

鶴ハ唯文章ズキニテ、何派ノ学問ナド、イフコト大キニキラヒ也。ワカキトキカラ何派ノ学問ニテモナシ。即、鶴ガ一家ノ学也。（同右）

と、独自の学問観を主張している。確かに青陵は、徂徠学にとどまるものではなく、独自の学説を形成している。その形成には、青陵が後半期の人生において、

凡ソ東海道ヲ往来ニテ八十ペン通レリ。木曾ヲ二ヘン、北陸道ヲ一ペン通レリ。滞リテアソベルトコロハ三、四十ヶ処。山ヘ登リテ見タルコト大小数百也。（同右）

と、日本各地を廻って、地理的条件、経済事情、風俗習慣などの実地を裏づけとしたことが大きく与っている。

この全国周遊の間、享和元年（一八〇一）に、尾張藩の儒者細井平洲が病気のため、代って青陵が、その儒臣となって江戸に招かれた。だが、

三年勤メタレドモ、江戸ノ水土、鶴アハズ、数大病ヲヤミタレバ、又、無理ニ御目見ヲ差上テ江戸ヲ出タリ。御目見ヲ両度差上タル人鶴一人也トテ、ムツカシカリシケレドモ、段かちニイ、ワケアリテ此事叶ヘリ。（同右）

と。青陵はすでに十七歳のとき、父が尾張藩に招かれた際、自分も留書という役に召されたが、「学問サイチウユヘニ」辞して就かなかつたから、尾州辞職は「両度」というわけである。まことに彼は、自由な環境に在ることを許されたものである。

青陵の著作のうち多くは、諸藩領内各地において、町人百姓を集めてなした講演の形をとって記されている。また彼は藩の経世策について言及し、功利論を詳述しているが、なかでも加賀藩を対象としたところが最も多い。^⑤ 加賀藩の藩儒でなかつた彼が、なぜ他の藩に比較して詳述しているのか。それはちょうど、彼の全国各地巡歴の最後の時期（文化二三年^{一八〇五}—二六^{一八〇六}）であり、年齢的にも、五十一—二歳という世情の苦楽をなめつくし、その思想と学問を、人間を大成させ、彼の生涯において、自己の能力を最高度に発揮しえた時期であつたからであらう。以後、文化十四年に没するまでの約十年間は、もっぱら京都に在住することとなつたのである。

青陵の多くの著作のなかでも、最も代表的なものが、『稽古談』五卷（文化十年成）であらう。これこそ、彼の最晩年の著作であり、独得な功利主義的、実証的実験的な実学として成熟しきつた、学問の集大成である。

二、商業資本の倫理 —— 覇道論 ——

蟠桃にしても青陵にしても、彼らの学問はけつして机上の学問ではなかつた。蟠桃は忙しい家業のうちに、どうして、江戸時代を通じて匹敵するもののないほど独創的な学説を生み出したのか。それは単なる好學心だけからはな

い。青陵にしても、諸藩の重臣や豪商たちに実践策を授けたりしている。青陵はいう。

学問ト云ハ古ヘノコトニクワシキバカリノコトニテハナキ也。今日唯今ノコトニクワシキガヨキ学問トイフモノ也。古ヘニナキ智恵ガ、今ノ人執行ニテ推シ出シタルコト甚多シ。凡ソ今ノ時ニクラキハ、ムダ学問ト云モノ也。（『稽古談』卷之二）

と。このような学問観は、蟠桃にあつてもこれとほぼ同じ態度を示している。

仁義忠孝ノ道、学ブベシ。記誦詩草ノ芸、長ズベカラズ。学文ヲシテ却テ天下輕薄ノ子トナルコトナカレ。ミナコレ実行ノ学ヲセズシテ、虚名ヲ希ウノ罪ナリ。カヘスト、モ過ツコトナカレ。（『夢ノ代』卷一ニ雜論）
といつて、儒学を現実生活に役立つ実学として学ばねばならないと強調する。

さらに、彼らの経世論において、各自が儒教の進歩的な解釈を行ない、現実生活における合理性と合致した経世論を展開しているところに、興味深いものがある。

それはまず、蟠桃の主張する合理主義的な経済認識からして、次のように論じている。

後世ニテハ徒ニ王道ヲ説クトモ、徒善徒法ニナリテ行フコトアタハズ。儒ヲ学ブモノミナ空論ヲ吐テ事実ニ施スコトアタハズ。ユヘニ人道世道ト仁義ノ道ト別物トナル。今ステニ事ヲ執リテ実行ニ施サントス。今ノ俗ヲ修ムベキノミ。徒ニ王道ヲ用ヒテ人情服スベカラズ。行ハザレバ止ベシ。（『夢ノ代』卷八雜書）

と。蟠桃は現実の世の中を、すでに王道がそのままに実行されえないものとしてとらえている。そこで、

天下国家ヲ治ムルノ法ハ、時ニ從ヒテ良法イクラモアルベシ。孔子モ顔淵ニ告ルニ、殷略ニノリ、夏正ヲ行ヒ、周冕ヲ服スベシトノ玉フナラズヤ。一概ニ古制ニ泥ムベカラザル也。（同右）

と、『論語』を引いて言っているように、

当世ノ治ハ当世ノ人ニ施スベシ。只ソノ中ニ善ヲス、メ悪ヲコラシ、害ヲ除キ利ヲ興シ、沿革損益スルコトハ、十世ト云ドモ、ミナソノ時所位ニ応ジテ施スベキノミ。（同右）

と。故に、今の世の善政とは、霸道によるべきだと説いている。商業資本家として、封建制社会を生きぬき、鍛えぬかれた蟠桃だからこそ、こうした現実をよく直視した態度を言明できたのである。時処位の強調は、たとえばすでに熊沢蕃山などにもみられるが、蟠桃の実生活に裏付けられた、このような主張こそ、普通の儒者の保守論と異なるところである。なお、蟠桃は政治を霸道としてとらえ、一見、儒教主義から分離する可能性の萌芽を含むがごとき説を論じている。だが、彼の死の前年、『夢ノ代』の最後に、

天下教法サマト有リトイヘドモ、儒ニシクハナシ。君君タリ、臣臣タリ、父父タリ、子子タリ。是ヲノゾキテ何ヲカ求メン。(卷二雜論)

と述べており、彼は本質的には徹底した儒教主義者であった。蟠桃は営利主義的社会観を極上のものと考えても、そこに新たな社会体制を想見するところまでは至らなかった。蟠桃にあっては、朱子学の「忠孝仁義」の道徳は、このうえない経世実学であった。

青陵は武士階級出身の儒者であったが、一般の儒者が唱えている政治観とは異なる新しい見解を持っている。

今、出津入津ノ御禁止有テ、他国ノ金ヲ吸ヒ取ルト云ハ、不人柄ノ權變ノ謀計也トテ、他国ノ金ヲ吸ハヌト云ハ、成程善キ人柄ナリ。左レドモ外々ノ国デ、他国ノ金ヲ吸フ仕掛ヲスルニ、此方様斗リ人柄ヲヨフナサルレバ、此国ノ金尽ク他国へ吸ヒ取ラル、ニ違ヒナシ。是ヲ覇ノ国ニ居テ王道ヲスルト云ナリ。(『経済話』)

然レバ霸道ノ急務ハ触ノ出シ様ト、金銀ノ他国へ出テモ、又ソレダケノ入りノ有ル様ニスルトニアリ。是ハ如何スレバ宜キト云ニ、簡法嚴刑ト云コトヲ行ハルレバ、此二ツノ患、サラリト解ルナリ。(同右)

と。とくに霸道として経世論を唱えているところは、両者ともに同意である。

三、封建論と営利主義

両者共に、かなり痛烈に幕藩体制を批判しているが、なんとと言っても封建の世、為政者を恐れ、その弾圧を警戒し

ていたことは事実のようである。たくましい批判精神と合理主義につらぬかれた『夢ノ代』でも、自叙のなかで、その中には、国家のことに及びしこともあるべきなれども、咎むべからず。唯是一家の事のみ。他人の見る書にあらず。

などといつて、支配権力への配慮をしている。

青陵が加賀藩を主たる対象として、彼の政治経済論について詳述した『経済話』の序において、

唯今迄書述タル諸談ハ、：：一言ニテモ、御政ノ非ヲ挙ゲヌ様ニ書タルユヘ、文言モバツトシテ、親切ナリガタシ。今度ハ一向ニ当リ障リ除クニ及バズ、鶴ガ罪ニハ決シテスマジキト、足下ノ請ガヒユヘニ、御政ノウハサニモ及ビシ所アル也。ソレトモニモ余リニ不敬ニ聞ユル所アラバ、削リテ後ニ、高貴ノ御方ヘ御覽ニ入ベキナリ。とのべているのも、いかに時世の封建権力に脅威されていたかを示すものである。

それでは、蟠桃が自らの生きた社会体制をどのように考えていたのだろうか。彼は階級社会や国家の起原論から論及している。

民アリテ後、君ヲコシラヘ治ムルナリ。国土アリテ生物アリ。人ハコレガ長タリ。シカレドモ教モナク礼モナケレバ禽獸ニ近ク、飽食逸居シテ争鬪ヤムコトナシ。ユヘニ衆人ノ中ヨリ仁智アル人ヲ君トシ、師トシ、能アルモノヲ臣トシテ、コレヲ教ヘ、コレヲ治ム。君・師・臣民ノヨツテ起ル処ナリ。ソレヨリシテ後、或ハ受禪シ、或ハ放伐シテ君トナル。コレ自然ノ勢ナリ。（『夢ノ代』卷三神代）

と、支配者の出現を説いている。それだけではない。蟠桃は政治の理想形態として、封建制がだんぜんまざっていることを主張して、封建・郡県比較論を展開する。

上古ハミナ封建ナリ。大抵ノ人、コノ日本ノ上古封建ナルヲ弁ヘザル、疎ト云ベシ。（『夢ノ代』卷五制度）

といい、人類が原始の状態から国家を形成するようになると、自然発生的に封建制をとるものであるとし、封建制が優れていることを主張する。それはすなわち、徳川封建制の合理化・擁護論者である。しかし彼の主張する君主は、

型にはまった朱子学の理論に基づく定義づけとは異なっている。といって単なる復古反動的な封建論を展開しているのではない。大名貸・米商人の立場に立つかぎり合理主義を主張し、封建支配者の政策に対して改善策を要望するなど、実地的な鋭い観察によって社会経済論をも展開している。

その反面、蟠桃は「工商ハナクトモスムベシ」(『夢ノ代』卷五制度)と、一見、商人である自己を否定し、農民重視の農本主義を説いている。だが、彼は青陵とちがいが、封建支配者に寄生することによって、いくたの危機に直面しながらも利を増し、その名を一世に謳われるほどの富豪となった人物である。彼の論は、農民の人格や生活を重んじたものではなく、封建権力者側に立った農本論にほかならない。彼の得意の高米価論にしても、武士と農民の救済を意図する提言にはちがいないが、その主眼は封建体制の維持にほかならない。しかも、こうした発言の根底には、封建権力と共存することによって巨利を得ようとする、寄生的大商人の当然の心情がうかがえる。

他方、商業重要視政策を提唱する青陵は、士農工商の階級社会の存在をも、商品売買関係に立脚して理解しようとしている。

古ヘヨリ君臣ハ市道ナリト云也。臣ヘ知行ヲヤリテ働カス、臣ハチカラヲ君ヘウリテ米ヲトル。君ハ臣ヲカイ、臣ハ君ヘウリテ、ウリカイ也。ウリカイガヨキ也。ウリカイガアシキコトニテハナシ。凡ソウリカイノコトハ、君子ノスルコトデナイト云ハ、皆孔子ノ利ヲイトフコトヲ丸ノミニシテ、ノミコミソコナフタル也。君臣ハウリカイデハナイトイ、タルヨリ、喰ツブシト骨折損ト沢山アリ。喰ツブシハ君ノ損也。骨折損ハ臣ノ損也。甚不算用ナルモノ也。天地ノ理ニチガフテアル也。：：一体、天地ハ理ヅメ也。ウリカイ利息ハ理ヅメ也。国ヲ富サントナラバ、理ニカヘルベキコト也。理ニカヘリテ見レバ、周礼ハ甚ヨキ手ガカリ也。天子ハ天下ト云シロモノヲモチタル豪家也。諸侯ハ国ト云シロモノヲモチタル豪家也。コノシロモノヲ民ヘカシツケテ、其利息ヲ喰フテアル人也。卿大夫士ハ己レガ智力ヲ君ヘウリテ、其日雇賃錢ニテ喰フテアル人也。雲助ガ一里カツギテ一里ダケノ賃ヲトリテ、餅ヲ得酒ヲ得ルニ何モチガイハナシ。：：聖人ハウリカイ算用ハツキリトキメルト云ハ、形名参同

ノコト也。形名參同ハ天地ノ理也。民ニハツキリト理ヲ見スル、民モ何カシラ人理ヲ心ニヨカネバ、聖人ノ御世ノヨウニハイカヌ也。（『稽古談』卷之一）

と、封建制社会の伝統的な階級的人倫関係は否定され、現実社会を一つの商業資本主義的社会体制として生成したものであると、定義している。

江戸時代も大体元禄以後になると、貨幣経済が発達し、つねに利潤を獲得し富を蓄積して行った町人階級が、その金権によって武士・農民を抑制するようになった。こうした経済現象は、幕藩体制下には異質なものである。それはこうした社会情勢の中で、蟠桃は現実社会をどのように認識していたらうか。

中古以来金銀ノ通用サカンニナリテ、金銀アレバ家富サカヘ、愚モ智トナリ、不肖モ賢トナリ、悪人モ善人トナル。金銀ナケレバ、家貧ニシテ、智モ愚トナリ、賢モ不肖トナリ、善人モ悪人トナル。終ニコレニヨリテ絶タルヲ継ギ、廢シタルヲ興シ、生死盛衰ミナ金銀ノ有無ニ預カルユヘニ、上公侯ヨリ士農工商ニ至ルマデ、ミナコレヲ以テ身命ヲ保ツノ第一ノ宝トナル。（『夢ノ代』卷五制度）

と、経済的営利主義をとなえた彼は、そこで自己の社会的立場を存察していくに相応しく、

今天下ニカシコキモノハ米相場ニシクハナシ。昇平ノ時ニシテ戦鬪ノ憂ナク、万民各其所ヲ得テ争フモノハ唯利ノミ。（『夢ノ代』卷六経済）

と。商人の営利活動是認を背景とした、実践倫理を説いていく。

青陵にあつても現実の社会を直視して、商業藩論を唱え、しかも、堂々と商業は賤しむべきものでないと明言して、諸侯自ら商業利潤を獲得することであると説く。

古ヨリ興利ノ民ヲニクムコト、是又キカイノ論也。民ノトリカヲユルメヨフト思ヘバ、興利ヨリ外ナシ。……真ノ興利ハ周礼ノ法也。（『稽古談』卷之三）

と。抬頭してきた町人勢力にくらべて、武士階級の経済的に窮迫した姿を指摘して、商業化を唱え、それにとまな

て功利論の必要性をさかんに主張する。

物ヲウルハ恥辱ナル事ハナキ也。金ヲ町家ヨリ借テ、返サヌガ大恥辱也。サレドモ是ヲバ又恥辱トハセヌ也。五ヶ年元利断リ、利金ハ永々断リ、元金バカリ年賦ナド、イフハ、極々サモシキコトノ恥辱ナルベシ。(同卷之二)と。武士生活の困窮の原因は、彼らが貨幣経済のなかに入りこむことによつて生計をたてていながら、現実を直視しないで商業を賤視しているためであると言う。さらに彼は言う。

先ヅ一体、事ハ其根元ヘユキテ見ルコト近シ。モト田ヲ民ヘワタシテ、民ヨリ米ヲアゲサスルハ何トイフモノゾヤ。何ノリクツデ民ヨリ米ヲ取ルコトナリヤ。セメテコノ理ヲ知タラバ、クワラリトワカルベシ。田モ山モ海モ金モ米モ、凡ソ天地ノ間ニアルモノハ皆シロモノ也。シロモノハ又シロモノヲウムハ理也。田ヨリ米ヲウムハ、金ヨリ利息ヲウムトチガイタルコトナシ。山ノ材木ヲウミ、海ノ魚塩ヲウミ、金ヤ米ノ利息ヲウムハ天地ノ理也。田ヲステ、ヨケバ何モウマヌ也。金ヲネセテヨケバ何モウマヌ也。田ヲ民ヘカシツケテ十分一ノ年貢ヲ取ルハ、コレ一割ノ利ヲ取ル也。……勿論、利ヲウムニ、物ニヨリテ遅速アルユヘ、利息ニ多少ナフテカナワヌコト也。田ノ年貢モ、山年貢モ、海年貢モ皆息物也。シロモノヲカシテ利息ヲ取也。是利息ハトラネバナラヌモノ也。山師ニテモ、何師ニテモナシ。天地ノ理也。(同右)

と、彼は万物の生成を商品としてとらえようとしている。

今問題としている時期は幕府衰退期で、明和から文化までの約六十年である。この頃になると、諸藩の繁栄策として、武士が商業を営むべきとする論客も多くなつて来た。こうした進歩的な議論が生じて来た背景には、いろいろな要素があるが、対外情勢にまず変化が起りかけていたことに気をつけねばならない。明和・安永の頃からロシアが日本接近を計りだしたことによつて、外国貿易に関する議論もしだいに興りだした。そして国内では、商人との妥協をはかりつつ放漫政策をとつた田沼時代から、緊縮政策を主張した寛政改革期をへて、再び放漫の大御所時代となる時期である。つまり対内外政策ともに、進歩的な議論と保守的な議論と交替しながら、いずれもが経済的危機を何とか

して逃げきろうとやつきになっていた時期である。

四、藩の財政政策批判

社会経済状態から考察して、江戸中期以後の自然経済に対する貨幣経済の著しい進展という封建政治に異質とされる現象は、すでに述べたように、諸侯の財政難を時を追って、深刻化していった。それではこの時期において、諸藩の政治に関して、彼らは如何なる見解を持っていたか。その基本的な考え方として、まず、蟠桃の高米価論にふれねばならない。米価問題は、封建社会で最も重要な社会問題であり、種々の論議を生んでいる。幕府をはじめ低米価を主張するものが多いなかであって、蟠桃は、

唯イタヅラニムリニ価ヲ引下レバ、餓ヲノガレ民ノ苦シミヲ免カル、トノミ思ヒテ、（『夢ノ代』巻六経済）
と、低米価政策を善政とするものを痛烈に批判して、

買持タル米ヲウリ出サシメ、他国へ積トラルヲモカマハズシテ、価ヲ下タレバ得タリトス。ア、金銀ハ食スベカラズ。多キニ賤シク、少キニ貴トキハ理ノ当然ナリ。金銀山ノゴトクニ積ムトイヘドモ、米ナキトキハイカマセシ。徒ニ価ヲ引下ゲ他国へ取ラレテ何ノ益ゾヤ。（同右）

と。全国的に商品流通が発達した当代では、米は価格の高低によって移動しやすくなっているから、少しでも高い国へ流出させることになり、低米価策をとればかえって食糧難におちいるというのである。このような認識の仕方は、青陵の富国論においてもほぼ同じようである。「君臣ハ市道ナリ」として、商業賤視の風潮をやぶって、諸侯自ら商業を営めという藩管商業論を主張する青陵は、次のように富国論を展開する。

今ノ世ハ隣国ニモ油断セラレズ、自国ヲモ油断ナフ養ハネバナラヌ時也。隣国ニモ油断ナラヌト云ハ、乱世ノ政伐ノ類ニ非ズ、売買損徳ノ事也。隣国ニ心付ズ、ウツカリトシテヨレバ、隣国ニテ、此方ノ貨財ヲアチラヘスイコム計策ヲスルユヘニ、油断ナラヌト云也。自国ヲモ油断ナフ養ハネバナラヌトイフハ、隣国ニテ土ノ出ノ多フ

ナルヨフニスルニ、此方ノ国ニテ工夫セネバ、隣国ハ富テ、此方ノ国ハ貧ニナル也。隣国富テ此方貧ナレバ、金銀ハ富タル方ヘナラデハ流レヌモノ也。ユヘニ此方ノ国ヨバ富サネバ、他国ヘ富ハ流レユキテシモフ也。以テノ外ノ事ニテハナキヤ、一向ニウツカリトシテヨルベキトキニアラズ。サレドモ又箇様ノ世故ニ、此方ノ国富メバ、又隣国ノ金銀ハ、日夜ニ此方ヘナガレコム也。（『稽古談』卷之四）

青陵は、もとより、蟠桃が仙台藩の財政建てなおしに成功したことに驚嘆し、その手腕を高く評価している。従つて、むしろ青陵が蟠桃に似かよつた財政打開策を取っているのも当然であろう。それは彼が、加賀藩の新田開発を請負わされた豪商の相談に応じた際、その資金のやりくりの仕方について、蟠桃が仙台藩で実施したサシミや米札の方法を進言しているところからも明白である。米札については、

コノ米札トイフハ、ヤハリ羽書ノコト也。羽書ハ新規ニハナラヌコト也。ユヘニ米札トシテ願フ。米札ハ米切手ノコトナレバ、米ノ切手モ、金ノ切手モ、通用スル味ハ同ジコト也。此米札ヲ足下ノ家ヨリ願ワルレバ、是亦永々ノ株也。金ガ百万両アレバ、是二百万両ニシテツカワル、ト云フモノ也。大キニ御勝手ニナルコト也。利息ノ出ヌ金ヲツカフテオルヨフナルモノナレバ、ケシカラズ上ノ御経済ニナルコト也。（『新懇談』）

と。この他、両者の商業政策論に似かよつたところがある。まず、青陵はいう。

他国ノ貨財ヲ自国ヘスヒコムモ、霸道ニテ智ノ株シキ也。（『稽古談』卷之四）

というが、霸道とは殖産興業政策と、諸藩間の専売制による相互の対立競争を、背景とした理論である。

其上ニ加州ハ大国ユヘニ、塩ニテモ米ニテモ、皆自国ギリノ相場也。トント他国トハ別也。塩ニ相場アリ、運上アリ。相場甚ダヤスケレバ、運上ノ金高少ナフナルユヘニ、塩ノ竈ヘ封印ヨツケテ、塩ヲ焼コトヲ禁ゼラル、也。コレモヨカシキ法也。塩ハ海ヨリ出ルモノ也。海ヨリ出ルモノヲ禁ゼラル、ト云ハ、富ノ字ヘ封印ヨツケル也。扱、右ノ如ク三ヶ国ノ塩ハ、飛州・濃州・信州ヘハ廻ヌコト也。加州ノ塩ヲ飛・信・濃ノ三州ヘ廻シタルホドナラバ、大テイノ利ニテハアルマシケレドモ禁ナリ。オシキコト也。サレバ北海ニ瀕スル国ハ、此海ノナキ国

へ産物ヲマワシタキコト也。(同卷二)

と、それは為政者の津留の法に対する批判であり、彼の経済的自由主義を示唆するものである。

ところで蟠桃の意見は、けっして藩管商業論ではなかった。蟠桃は営業の自由を唱え、徹底した経済的自由主義思想を展開している。しかも、そのような主張は米価だけでない。油・酒・紙・絹・布・糸・綿等々あらゆる商品について、価格は人為によって定まるのではなく、需給関係で定まるものであって、その間に国家権力が介入することを強烈に拒否しているのである。

このように蟠桃の経世論を、特に称賛している青陵であるが、本質的なところに見解の差異があるとみなされる。両者が共に示唆している経済的自由主義にしても、青陵のそれは、武士階級の救済を意図する政策論についての批判的発言であって、蟠桃の商業利潤を生むに有利な方策を意図したものは、決して同じでない。

結びにかえて

全盛時代の懷徳堂学派の経済思想の特質を明らかにしようと、蟠桃と青陵の経済思想を比較対象視してきた。青陵の生いたちについては、不明な点が多いが、それらは、今後もっと明らかにして行かなければならない問題である。ここでは、史料的にも『夢ノ代』と『稽古談』『升小談』『天王談』『経済話』(『海保儀平書』)『變理談』『洪範談』に限定し、しかもそれらの一部をとりあげてみたにすぎない。だが以上の考察から、その特質はかなりつかみえたと思ふ。

ここに、いくつかの問題点を取り上げた。経済思想は、宝暦期以降に特徴的にあらわれた経世論である。財政難を乗り切ろうとする封建支配体制は、すでに動揺しだしていた。幕府や諸藩の対策も、進み出した時代の流れにはいかんともしがたく、ついに発展してきた商品経済への依存度を高め、ここに封建権力と商業資本との結合をますます深めて行った。蟠桃と青陵、この二人の経済思想は、商品流通が発達して全国化した当代、流通経済より利潤を

得ようとする商業資本主義的思想で、両者の商業政策については確かに似かよった点がある。しかし問題は、それはたして誰のための政策であったかということになる。その主張は、商業資本の利害を基調とする理論であったとしても、青陵は武士階級の利害を代弁するものであったし、蟠桃にあっては、寄生的大商人の巨利を博すための代弁以外のなものでもなかった。

この時代は、農業生産に依存する自然経済を基盤にしながら、他面では商工業の発展にもなって貨幣経済に依存するという、二重性の時代であった。このような二面性が、わが近代思想形成の基盤なのである。そこでは、青陵が封建的身分制の倫理を否定し、労働の提供とその対価としての報酬といった資本主義的社会観をもって、階級社会やその中に起る諸現象を把握しようとした。そこには、普通の儒者にはみられない、実践的要求の中に現実的な経世実学を展開している。蟠桃のそれもいっそう現実的であり、合理的であった。しかし、両者とも農民搾取のうえに成りたっている支配体制を基盤にする理論である限りは、近代思想とはいえない。

青陵にしても蟠桃にしても、当時勃興期を迎えた洋学より得た知識が、両人の思想形成に影響を与えている。蟠桃は、麻田剛立について天文学を学んでいる。青陵は、彼の著『天王談』に、青年の頃蘭学者桂川甫周から「理」ということをさとされた様子を詳述している。蟠桃ほど蘭学を積極的に接受しなかったにしても、儒学以外に蘭学者より得た知識も、彼の思想形成に影響を与えたことは事実であろう。

だが、陰陽五行説による儒学的自然観では、意外にも大きな見解の相違がみられる。それは両者の、西洋自然科学への接近の仕方において、距離の差があることを示している。しかし、西洋自然科学の知識の普及およびそれによる学問の進歩が、懷徳堂学派の特質ではない。その特質は蟠桃をして、そのような実証的・合理的な学問態度に進ませたこと、換言すれば、朱子学から「格物致知」の精神を媒介として、彼に唯物的思想を生み出さしめたところにある。この二人の思想を対比するには、このような自然観についても論述しなければならぬが、別の機会に述べたいと思う。

註

- ① 「史泉」第四十一号所収。
- ② 『夢ノ代』、日本思想大系第四三卷所収、有坂隆道校注、近刊。『夢之代』、日本経済叢書第二五卷、日本経済大典第三七卷。なお、本稿の蟠桃の引用文はすべて思想大系本の原稿をもとにしている。
- ③ 『稽古談』『升小談』、日本経済叢書第一八卷、日本経済大典第二七卷に所収。『稽古談』、日本思想大系第四四卷所収。なお、本稿の『稽古談』の引用文はすべて思想大系所収本による。
- ④ 青陵は、蟠桃の事跡を詳細に述べている。従って、当然両者の間に直接交渉があったと考えて然るべきであるが、現在知りうるかぎりの資料では、全然見出すことができない。
- ⑤ 加賀藩の経世策についてとくに論述しているものは、『綱目駁談』（『青陵遺編集』所収）、『海保儀平書並或問』（別名『経済話』。日本経済叢書第一八卷、日本経済大典第二七卷、日本思想大系第四四卷に所収）、『新墾談』（日本思想大系第四四卷所収）。本稿中の上記資料引用の際、思想大系本に所収されているものは、それによる。